

特42

750

明治十五年六月

日蓮
聖人
妙法
正行
錄

三
篇

蓮長師錄倉へ出て給ふ事

蓮長師錄倉へ出て給ふ事

日蓮聖人妙法正行錄 三篇

蓮長師錄倉へ出て給ふ事

並北嶺ふ大衆と大問答の事

爰ふ蓮長師ハ古郷に立て武藏乃國帷子乃里の農
家ふ宿り此家の主と難給ハ亭主ハ打笑竹の火筋
ふ灰掻平扱とよ不審ハ道理至極我も初ハ佛と云
ハ同ト佛經と云ハ同ト經神も佛も別ふしと思て
有しふ近頃所用の事なてて久し録倉ふ在と云ふ

當時念佛の生如來大阿彌陀佛とて尊き聖者の在
と聞て其處ふ受戒爲衆々せて念佛安心の要路
汲聞ふ一代聖經八萬四千其數多は履きども未代
我等々修行ふ念佛三昧ふ如ふし統て釋迦ふ
も藥師ふも心移とて拜汲ハ禮拜雜行とて其修行
の穢ゆを譬へ念佛稱名爲ども千中無一とて千ふ
一ツも往生ハ遂難唯諸佛諸神汲振棄て一向ふ念
佛せば由や五逆のむきバとて弘き誓ふ漏やハと

是ハ彌陀尊の本願ふて其御經ふ明白ふと法
然上人の選擇集じり云書汲講釋とて最有難を説
給ふ係る事の實ふきバ社當時繁昌の鎌倉ハ云も
更ふり武士も下郎も百姓も物識も知ぎるも念佛
爲人ハ濱の砂乃數多し天台眞言諸宗の名僧智識
さへ今ハ唱ぬ人もふし罹る尊き教汲聞家ふ歸て
是迄の持佛の釋迦汲捨るも惜と雜具の中ふ打入
て納戸の隅ふ指置爲汲何の程ふり小童等々持出

て笛ふ太鼓ふ打交て獅子と釋迦とを躍せて遊物
かゝ打割て風爐焚ふハ増え兒と其儘ふ差置は
と語被聞て蓮長師ハ且憫且悲と法衣の袖ふ涙被
おさへ我ハ房州小湊とて浦崎廻き山寺の僧ふ
が齡今二十歳ふ超ゆども熟々佛經被見ふ今此
三界ハ釋迦一佛の有縁ふハ彌陀稱名被勸るとて
本佛釋迦被禮拜爲被難行とて誠爲ハ以何ふ被や
甯の黄色き我口ふ言ハ云ぬふ増きども一夜の宿

ふ露凌ぐ惠ふ報恩は産る被よ昔天竺伽毘羅衛城
ふ五百の猿猴ハ折忘も秋の最中頃月最きゆる
溪河ふ寫りし影被臨見て我社探ら兒と争へども
偵ふ深き淵河ふ猿の智慧の淺しく一疋の猿ケ松
の下枝ふ取付ハ又一疋の猿被の下乃手ふ鉤きか
り如し宛五百の猿を五百尋の綱被下爲如忘て漸
々水ふ手被差入鏡と光る月影被寫よ藤よと蔓ふ
て纏かゝげて探ども果迄斯夜も終ふを内ふ松の

木垂の枝折て五百の猿ハ残ふを水ふ溺して死
るとぞ本佛釋迦の月夜觀迹佛彌陀の月影夜二
向專修の葛蔓ふ繋ぎ取らんと思うち命の松乃枝
折て奈落の底ふ沉やせんと最懇ふ説諭給るふ
若きふハ似ぬ發明の御僧かふ夜も深更をハ納
戸ふ入て寢恭給へ翌日は聞んと欠伸ふ念佛啮
ほせて主も其處ふ臥ふる蓮長師ハ明の朝爰爰
打立先鎌倉ふ入ふ昨夜主の物語ふ聞つる大阿

ク許ふ尋行當時諸宗ふ秀爲念佛ふ心爰寄淨土の
安心爰聞はやと心急と道果行だ漸會其日の未乃
刻其地ふ剽着き車小路と云所ふ聊の縁故爰尋
爰ふ姑時と枕かゝる鎌倉の繁昌ハ聞ふ増る賑と
往來鬧忙市人ふ心爰慰めつ姑を勞爰休給る當
時鎌倉の執權職北條武藏守平泰時ハ去る建仁元
年六月十四日父義時逝去り嫡子ふまじり其跡爰
繼て執政をり泰時ハ賢良温順ふして仁君の譽高

重簾讓節義汝心ふ存ト專天下の政道ふ預り記録
 所の門ふ鐘汝掛置不時の訟汝聞給ひ毎月十日廿
 日晦日汝決斷の日と定免頭人評定衆汝聚免訟の
 理非汝決其政務嚴重ふして加も慈愛深を常ふ
 側の人ふ教て宣やう人として足事汝知むハ人
 間一生の禍ふり足事汝知むハ百萬の財寶汝積て
 ん安き心無を無理も非道も是自起ふと云由汝語
 て人の爲世の爲直成道汝諭給ゆハ君の御側ふ伺

候爲人々ハ麻ふ交る蓬の如を曲心ハ非去る時
 志も彌生十六日評定所自退出の處庭乃一木の櫻
 花空吹風ふ昨日今日梢淋く散るもハ泰時暫時打
 詠め天下の政務ふ暇無を誠ふ花人汝待む今年
 春乃色香ふも飽て別離悲をよと筆汝染て

事志げき世のふらひみ物憂けれ

花の散ふん春も志らむ

と和歌汝詠給ひき斯も優美ふ志て明察ふる泰時

晝夜心致政事ふ盡給ゆへ諸國穂ふして鎌倉も年々ふ賑ひ増り鶴ヶ岡の赤橋の前ふハ常ふ騎馬の供待多々長谷觀音の大路ふハ嬌艶代參の女乘輿引ふ續だ大藏の藥師供養終じハ窟小路の不動ふ開帳の標致建綴喜街の遊女佐々目ヶ谷の歌舞妓放下物真似辻商人己ヶ様々の稼業も知系て被る聖代の恩其街衢の繁昌ハ今致盛と見えふるも授も運長師ハ兼而聞つる大阿ヶ住所致尋給ふ御所

より東十八町斗り霧ヶ澤好見と云處ふ菴と結ひ極樂往生の門致開き鎌倉中の男女致集え法談と師も亦其席ふ交り淨土の宗意を聽給ふ淨土宗と云ハ觀經雙觀經阿彌陀經ふ天親菩薩の往生淨土論致添て是致三經一論と稱もて宗旨を建我朝ふて法然上人と云ハ美作國稻岡の人父ハ時國母ハ泰姓或夜靈夢ふ剃刀を吞と見て懷妊し長承二年四月七日誕生在々生乍ふとて叡悟發明成志ヶ

惠心僧都の往生要集讀て初て一切の經論捨
て念佛一宗建立爲給ふ然ハ以何ふる五逆十惡
の凡夫成とも自力の根性と捨て南無阿彌陀佛と
さへ唱せバ此惡世界の湊離せ九品蓮臺の彼岸
へ速く住生爲おとハ夢々疑あらぬ哉がし法華眞
言等の聖道門の難行雜行ハ擲置て罪業の罹る
凡夫救ほそ大慈大悲を忘ふと建久五年甲寅選
擇集撰あらわして無常説諭と鉦志也木哀と尊き

墨染の法衣乃袖と搔合せ黒谷吉水の邊ふ道場
開き一向ふ専修念佛説勸給ふる壽永元曆の合戦
より未ど十年ふふるさきとハ親説討と子と殺せと
兄弟没失ひ妻子ふ別離世の憂目説見爲者幾千萬
ぢや幾億萬ぢや血腥き風いはど街頭と去ど哄箭
叫の循羅乃聲猶耳ふ殘ぬ懼る恐と憂世も唯一
睡の夢成るハ哀果ふき飛花落葉の夢乃世ふ何
樂と何説り待んと愚ふる身も賢も無常の風乃心

ふ染七人の菩提の爲我々後の世乃頼ふと念佛の
聲四海ふ囂く何ふる無道心の者あらず心弱も
皆法然上人の唱名念佛ふ靡かぬ艸木ハあかす
る今法然上人建曆二年の遷化より今年曆仁元年
迄星霜僅廿七年教達ぬ十即十生蓮長師も此念佛
ふ心波委心安心の法門ふ心耳波澄給る又此頃
念佛者の語波聞給ふ佐輔ヶ谷ふ然阿良忠上人と
て法然上人の孫弟ふして學解廣々念佛の得悟慥

成由波聞て蓮長師又爰ふも往通ひ三心四修の宗
脉波受給る夫より延應の秋暮て仁治も早二年
と送給うち彼の好見の大阿上人病の床ふ臥て古
今の大惡病波煩ひ苦痛ふ堪か晝夜菴の中波轉
び泣叫つゝ虚空波擲て息絶る遷化の後死骸波
見ふ身縮て小兒の如き其色黒墨波塗爲ヶ如
と波其隨身の弟子等の物語波聞て蓮長師ハ扱も
淺間敷事か守護國界經ふハ死人の十五相波説

て地獄ふ落涙明し天台摩訶止觀ふも死人の形相
と委を教給ふ此經釋と鏡と爲ふ大阿上人の地獄
ハ疑無在俗の身ふとバ過去の宿業も此ふ現る事
もやあらん道德圓滿の上人數年の修行其詮無重
臨終の正念汝失ひ最後ふ地獄の相汝顯爲ハ以何
ふぞやは是正敷佛意ふ協ぬ處有て其現罰ふはらぬ
やと我と問我と答て點頭給るり又此鎌倉の繁昌
ふ諸宗の學者十宗の碩德春乃野ふ立茅花の如重

最赫々志を見ゆる物ゆへ彼ふ問是ふ尋學解汝凝
さんと思ども何んせん鎌倉も泰平久しき御代の
習ひ文道武道美榮多重萬般ぞべて花車風流ふ成
もつて行き琵琶汝彈ト或ハ爪琴小鼓ふ雜と調の
糸竹も都下の白柏子袂かぎして媚汝唄ひ嬌艶わ
る風俗の何り出家ふ押移り錦乃袈裟ふ七寶の
珠汝連し百八の煩惱繫ぐ艶輕薄佛事供養も布施
がとと濁心の貪慾無懺實とからぬ事のみ多く我

も亦只暇初の草枕五年此ふ在るまは一先安房ふ
立歸り其上ふ兎ふも角ふも思立はやと歸國の要
意彼是と調給うち二月四日夜ふ入成乃刻頃西の
天ふ赤白乃氣三筋立て二筋ハ程無く消て赤氣一
筋火の柱被建立たか如令中天ふ衝立てり町中の男
女驚て見物ぞ御所ふ於て陰陽師安部保貞被召て
御尋有るふ是ハ慧形の氣と名付俗ふ火柱と唱
へ昔村上天皇康保年中現爲由舊記被引て言上せ

り以何成事の前表ふやと上下安心もあかてある
蓮長師ハ此取沙汰被後ふ聞ふし房州さして歸給
ある幾程無令同七日の朝一天曇て雨ふやあふん
風ふやあふんと見うちふ己乃刻頃大地俄ふ震動
し山鳴谷應録倉府内の大小名堂塔伽藍被搖潰し
土煙天ふ覆て暗夜乃如く其中より處々ふ火然出
男女の泣叫聲最哀ふ震動の間ふ聞へ物凄も恐ふ
んと云斗ふし此一朝の地震ふ人畜牛馬等死滅損

傷其邊際汝知^ら御所よりハ四日^よの火柱^{ひばしら}七日^{なな}の地震^{ちきん}合記^{あひあひ}とて京都^{きんぎよ}ふ注進^{ちゆしん}を斯^かる鎌倉^{かまくら}の騷動^{さうどう}汝旅行^{りょぎん}ふ聞^きつゝ蓮長師^{れんぢやうし}ハ東條^{とうぢやう}小湊^{こみなと}ふ歸着^{かへりつき}兩親^{りやうしん}の無事^{むじ}面影^{おもかげ}汝拜^{はい}し鎌倉^{かまくら}の物語^{ものがたり}ふ春^{はる}乃^ひ一夜^{ひとよ}の明安^{あけあせ}く次の朝^{あさ}ハ清澄^{せいぢやう}ふ登^{のぼ}り師^しの御坊^{ごぼう}の無恙^{むぢやう}汝喜^{よろこ}び此年^{このとし}月^{つき}修行^{しゆぎやう}ふ志^しを浄土^{じやうど}の一宗^{いつしゆ}其外^{ほか}諸宗^{しよしゆ}の論義^{ろんぎ}古今^{ここん}名僧^{なみそう}の物語^{ものがたり}彼此^{これこれ}同座^{どうざ}の僧達^{そうたち}へも談^{たん}ト聞^き給^{たま}ハ師^しの道善^{だうぜん}汝始^{はじめ}二間^{にま}寺^{てら}の道義^{だうぎ}も此席^{このせき}ふ在^おり浄顯^{じやうけん}義^ぎ淨^{じやう}其餘^{そのほか}青蓮^{せいれん}

明心^{めいしん}等同寮^{どうりやう}の所化^{しよけ}はて耳^{みみ}新敷^{しんしき}物語^{ものがたり}ふ感入^{かんにり}其達^{そのたち}辨^{べん}と云^いひ才學^{さいがく}と云^いひ一山^{いちさん}の衆徒^{しゆと}膝^{ひざ}汝打^うて驚歎^{きやうたん}し師^しの御坊^{ごぼう}ハ喜悅^{きげつ}の涙^{なみだ}席^{せき}汝沾^{うる}給^{たま}る清澄^{せいぢやう}ふ暫^{しば}し在^おりち小乘^{こじやう}權^{けん}大乘^{だいじやう}法華^{ぽうげ}真言^{まごん}の四門^{しもん}乃^{すなは}戒行^{かいぎやう}の次第^{しだい}汝詳^{しやう}かふ記^きし戒躰^{かいたい}即身^{じやくしん}成佛^{ぶつぎ}義^ぎと名付^{なづけ}山内^{さんない}の僧達^{そうたち}ふ示^あ給^{たま}ふ是法^{こゝろ}門筆^{もんひつ}作^{つく}の初^{はつめ}ふア斯^すて情世^{じやうぜ}の形^{かたち}様^{さま}汝思^{おも}ふ鎌倉^{かまくら}ハ當時^{たうじ}日本^{にっぽん}の大都會^{たいとくわい}ふもども法^{ぽう}汝弘^{ひろ}通^{とほ}ふハ宜^{よろ}宜^{よろ}道^{だう}汝學^{まなぶ}ふハ益^{えき}ふし又^{また}罹^うる山寺^{さんてら}ハ閑寂^{かんじやく}ふもど

も書藉ふ乏を其上道談爲友もふし千將莫耶の
名劍も屢磨だば以何ふせん傳聞比叡山ハ傳教大
師圓乘戒壇の山と云ひ又三井寺南都の七大寺ハ
今の僧ハ疎もろも其宗々の開山ハ入唐渡天ふ艱
難坂凌ぎ苦修練行の跡ふもバ經論書類も定て多
からん咄哉彼の山々を遊學し先師の道ヲ窺はや
と其心構とつ旅行の用意も僧の身ハ立事易き水
禽の跡濁をトと道善御坊又同寮へも暇坂告今年

も暮る秋の日ハ日影ふ笠坂かざしつゝ京都を
て發足爲給るるヶ鎌倉ふ立寄年頃親き人々ふ音
信給ふ世ふ國家の棟梁と頼つる北條武藏守泰時
も此六月十五日年齢六十二歳ふて草頭一時の露
と消給ひ暗ふ燈火坂失爲ヶ如く政道の古實忽ふ
亂ふんど泰時の嫡孫四郎經時武藏守ふ補ふも
鎌倉の執權と成る萬端の事昔ふ似だ人の心も改
り其上去年丑の秋より五穀登だ二年の凶作四海

爰ふ困窮し世の淺猿き事云斗ふし蓮長師ハ鎌倉
の旅行乃宿ふ思ども比叡山の學僧尊海と云人ふ
因縁結び種々佛理談ト年頃の友乃心地とて底
意無々物語ひ我も叡山ふ學問の志願有由語給ハ
尊海も大ふ喜び己ハ座主信尊の弟子ふて嗚呼ふ
とども叡山の四俊とら人も算る者ふるケ今般法
用の事ありて鎌倉の御所ふ仕候し曾ケ用も早果
を御身ハ才學の壯士と覺ゆる哉疾叡山ふ登給

一我伴恭せんと有るふぞ聞ふ灯火渡ふ船願て
もさき同伴と蓮長師ハ深々喜び秋の日疾の短て
其夜ハ相摸の懷島ふ一宿し晝猶暗き竹乃下今日
越わぶる足柄乃關路程無々駿河ふる百度見ても
雲風ふ姿定ぬ富士乃嶺の今日も見あるり明日ハ
又宇都乃山邊の鳶蔓わをるも夢り武士の矢矧乃
橋乃一筋ふ皇都城をして急ぐ身ハ間遠の渡し風
寒く旅行の疲姿ハ鬱せトと今日は曇る鏡山滋

賀乃湖水底清き蓮長師ハ彼の尊海ふ伴われ坂本
よて叡山ふ登給ひ倩々四境の風景眺給ふ西北
ハ山城國愛宕郡ふわをり東南ハ近江國滋賀郡ふ
属し嶺ハ四明ヶ嶽とて人蹟絶をる高嶺ふして爰
ふ登もバ諸天の御聲も聞つるし加茂川大井の二
流愛宕高雄の山々より淀川の流遠を難波津乃浦
より蒼海渺々として帆波掛をる船ハ昆蟲の蠢ふ
似をり東南の眼下ふハ唐崎の松栗津乃濱湖水の

樂波悠々として沖の小島竹生島ハ水鳥の波ふ遊
かど怪ゆる山水の美景四境遠し萬古の風色足
どと云事ふし其棲可學室の邊り樹木森々と生茂
り庭ふ雲蒸苦滑りふ山ハ點々て佛の禪定披露し
水ハ語て如來の演説ふ形どる億萬の經論ハ一山
の草木より多し三千の學僧ハ智解凝て囂か々
ぞ實や傳教大師始て此山城關給し時
阿耨多羅三藐三菩提の佛達我々立杣ふ冥加在給へと

讀給志も最尊く天竺の靈山唐土の天台も斯や
ありるん我此山ふ久し今修學せば一世の大願も
茲ふ成就ぞ願しと深く喜び始て法華經以て我
が本分と定め三塔の學衆ふ親と天台章安妙樂の
釋書茲熟覽し天台一宗の學茲講爲事其一日の學
間餘の僧三年の修行も猶及難し茲ふ於て當山の
役寮ふ評議志て東塔の圓頓坊と云ふ一院茲住職
せし是此頃淨明經海又心賀ふと云る何も三千大

衆の上頭ふして博學の譽高し蓮長師ハ常ふ此等
の人ふ立交り經茲講ト釋茲論爲の外他事ふ今月
日茲送給る也今朝志も又常ふ變ふぞ香茲拈り日
課の御經ふ心茲移し梵音唳々と讀澄し深く佛意
茲勤考給ふ上行無邊行等の本化の大菩薩未法第
五の今ふ出現し法華經茲以て廣く濁惡の衆生茲
救給可由御經ふ明ふ也我佛緣甲斐無を進てハ天
台傳教ふ見へぞ退てハ彼の上行菩薩の出現乃時

ふも未と逢奉ど何坂頼と誰坂師として今經乃利
驗坂仰がえんと御涙無端ふ膝坂沾るる折早講堂
ふ大衆坂聚る鐘乃聲溪間の雲乃隙洩て噎々と聞
ゆるふぞ御經と卷納つゝ三禮爲徐々と履坂曳て
講席ふ出勤成給るる此日學徒多く聚て講主よ
法華經と大日經との差別以何ふと云ふ問と大衆
ふ出と蓮長師席と進と法華經ハ醍醐の極説大日
經ハ生蘇味乃權教力士と小兒の腕競此二經ふ何

の論ガあらん當山ハ慈覺大師ふ至て開基傳教大
師の法水忽ち彼の真言乃泥ふ濁をりと粗其條々
と舉て席坂打て談ト給るり我朝法華の元祖傳教
大師と云ハ神護慶雲元年と以て生も稚名と最澄
と呼ぶ初見山科寺の行表僧正と師として六宗と
學ぶ後漢土ふ渡り天台の教法を傳て日本ふ歸り
大ひふ華嚴三論等の六宗と破南都七大寺の高僧
蜂の如く起り傳教大師と佛敵と罵るる

明治十五年七月六日御届

東京府平民

編輯兼出版人 金田儀兵衛

芝區本芝壹町目十三番地

定價六錢